

松下国際財団 研究助成 研究報告

【氏名】 森田 良成

【所属】(助成決定時) 大阪大学大学院 人間科学研究科 博士後期課程

【研究題目】 仕事と貧しさについての人類学的研究

【研究の目的】

人やモノや情報の、歴史上かつてない規模と速度による流通が、時間・空間の圧縮と世界の一体化を推し進めているといわれる。このときに想定されているのは、資本主義経済の拡大と、それによる多様な経済の包摂である。この過程において、こんにち「貧困」は、先進国と途上国のそれぞれの舞台上、依然として、また「格差」などの新しい難題として関心を集めている。

文化人類学は、いっけん「貧しい」ものに見えるがしかしそうではない、「物質的には恵まれていないが、文化的・社会的にはきわめて豊か」な異質な生活がたしかにありえることを示してきた。狭義の経済合理性にのみ基づいた価値判断を相対化しながら、個人と集団のあり方の多様性を具体的に示してきた。だが、大規模な人やモノや情報の流れは、かつて人類学がその相対化の主張の足場として想定していた「未開」の社会にも波及している。「貧しさ」に頭を抱えるのは、何もわれわれの側だけのことではなくなっているかもしれない。

この研究では、インドネシア、西ティモールといういわば世界システムの周辺地域における「貧しさ」について、人間の生存を生物的・社会的に支える行為であり、またしばしば「貧しさ」を耐えられるものとし克服するための手段として位置づけられる「仕事」に焦点をあてながら考察する。

【研究の内容・方法】

西ティモールにおいて、南中央ティモール県のある集落と、島の西端に位置する町とを行き来する出稼ぎ農民の仕事と生活について現地調査を行った。西ティモールで活動する開発機関のレポートでは、農民の暮らしについて、限られた現金収入、慢性的な食糧不足、栄養失調、貧血、そして誤った食習慣などの文化的障壁といった多くの問題が指摘されている。西ティモールの開発は、東西インドネシアの格差の是正という国内問題であるとともに、貧困削減を目標に掲げる諸機関が解決を図ろうとする国際的な貧困問題の1つである。

ここでいう仕事とは、具体的な財の生産・獲得という、いうならば狭義の仕事である。この仕事とはまず、農民たち自身にとって、そして町で彼らを雇用する立場の者や、彼らの「貧しい」生活を改善しようと働きかける外部の援助者にとって、経済的な成果や報酬につながる生産活動として、個人と世帯の生活の維持と向上を可能にする主な手段として想起される(むろん、仕事の概念は、西ティモールの農村においてはほぼ女性によって担われる家事仕事などにも拡張可能であるが、今回はまず狭義のものに限定し、検討をしなかった)。村の農民たちにとって仕事とは、第1に、村の畑における主食のトウモロコシほかの作物の生産であり、第2に、現金収入を得るための、出稼ぎ先の町での廃品回収と玩具行商である。町への出稼ぎは男性の領域に属するもので、町を荷車を押して歩き回り、買い取った廃品をジャワ人の親方に売却するか、行商を行うことによって現金を得る。村の畑での農作業は、村に残った女性と、頻りに町と村を行き来する男性とで行われる。村では商品作物の栽培はほぼ行われておらず、作物は主として、自家消費と、儀礼の際や日常での客への振る舞いのために行われる。町と村を行き来する男性たちの仕事と、「貧しさ」を含む経済領域についての彼らの語りを収集し考察した。

【結論・考察】

2つの仕事を行き来することは、市場経済と伝統経済を行き来することであり、利益を最大化する経済と、威信・名誉を最大化する経済を接合することである。こうして営まれる彼らの暮らしは、貧困の苦難とはまったく無縁の世界ではないものの、一定の望ましい水準に到達していないことを示す指標の積み重ねから想像される貧しい生活とは異なる。

西ティモールの農民たちの生活は、何もその経済的に厳しい暮らしをただ維持するためだけにあるのではない。彼らの現在は、何らかの機会に行き当たりさえすれば、どの部分からでも異質な世界へとすぐさまつながり、順序や予測など関係なくただちに大きく動き出す潜在性をもつものとして語られ、また営まれている。彼らは、貧しさに時に頭を抱えつつも、饗宴と儀礼のために蓄えを使い果たすことをいとわず、生成されつつあるものに開かれた未確定の現在のまだどこにも行きようのないところで、どこかへ行く希望を抱き続けている。